

肺がん と COPD(慢性閉塞性肺疾患)について～病因、予防から早期診断・治療～

公益財団法人ちば県民保健予防財団理事長

藤澤武彦

COPD と肺がんはともに喫煙と深く関連し、死亡者数が増加していることから喫煙の対策が求められている呼吸器の代表的な疾患である。1996 年における厚生労働省疫学調査では COPD と診断されていた患者数は約 22 万人と報告されていたが、福地等の研究では、本邦における COPD の患者数は約 530 万人と推定され、90%以上が未診断であることが明らかとなっている。また、米国では 1965 年における冠動脈疾患、脳血管疾患、COPD による死亡率に比較して、1997 年では前 2 者では 40－60%ほど減少しているのに対して、COPD だけが 2.5 倍以上増加していることが報告されている。一方、本邦では悪性新生物による死亡が第 1 位を占め、その中でも肺がんによる死亡率が最も高いのが現状である。悪性新生物による死亡を減少させるためには肺がんによる死亡を減少させることが不可欠である。さらに、世界保健機関による死亡順位に関する報告では COPD および肺がんは 1990 年ではそれぞれ第 6 位と第 10 位であるのに対して、2020 年においてはそれぞれ第 3 位と第 5 位になると推定している。

これら呼吸器の 2 疾患の研究は最近まで個別に行われことが殆どであった。

しかし、COPD 患者には肺がんが多発し、非 COPD 患者に発生した肺がんより死亡率も高いという疫学的研究も複数報告され、また近年における分子生物学的ならびに遺伝子学的な研究の進歩により COPD と肺がんの遺伝子的共通性が明らかにされるとともに、肺がん発生に COPD の組織修復に関わる多分化能を持つ幹細胞が直接関連している可能性が推測されている。このような新しい研究を根拠に、われわれは COPD と肺がんの早期発見を目的に検診現場で問診票と肺チェッカーにより COPD 高リスク者を抽出し肺機能検査を行い、COPD 罹患者には低線量 CT 検査を行う検診を実施している。この試みは本邦では初めての COPD と肺がんの早期発見に関する疫学的研究であり、両疾患の死亡率減少を目指している。

本講演では COPD と肺がんにおける分子生物学的ならびに遺伝子学的共通性と COPD 合併肺がんの臨床的特徴とその予防などにつき考察し、COPD の早期発見は肺がんの早期発見にも繋がることを述べ、また両疾患の対策には喫煙率半減が必須であることを強調したい。